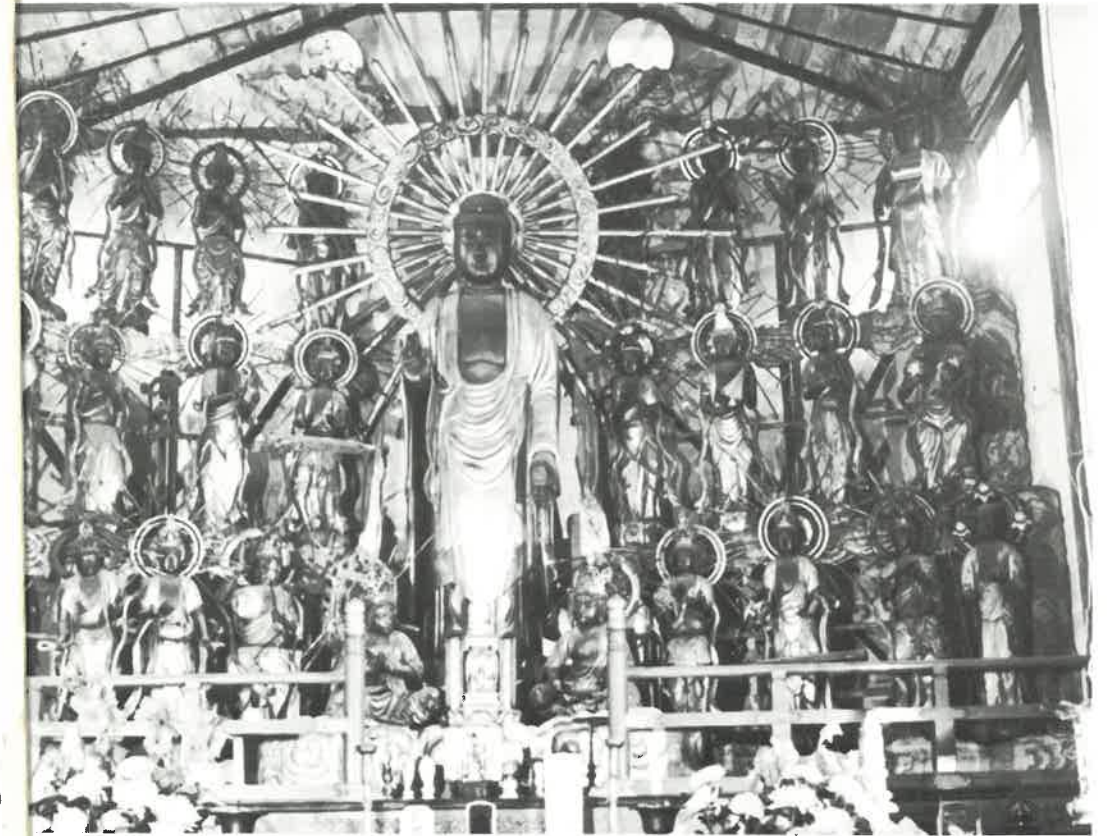


山台市の仏像彫刻Ⅱ

(菩薩部Ⅰ)



五菩薩像 (報恩寺本尊; 江戸時代後期)



文化財保護シンボルマーク

仙台市教育委員会
昭和63年2月

緒 言

今回の文化財パンフレットは前回の「仙台市の仏像彫刻Ⅰ（如来部）」にひきつづいて、彫刻編の第二回「仙台市の仏像彫刻Ⅱ（菩薩部Ⅰ）」と題して、仙台市内にある仏像彫刻の中で、菩薩部像に焦点を合せその主要なものを掲載した。

菩薩部像というと独尊により信仰されるものと、如来部像の脇侍仏として信仰されるものがある。ところで、仙台市内にある菩薩部像は、観音像を除きその多くが如来部像の脇侍仏、それもその寺の本尊として安置されているものであり、単独像はわずかである。したがって、今回掲載した仏像もその大部分が脇侍仏として安置されている像である。また、観音像については、仙台市内に三十三観音の信仰（正式には仙台三十三番札所観音）があることもあり数が多いため、次集に詳細な解説をすることにして今回はその概要を記す程度とした。

なお、今回掲載した40枚の写真も前回同様各寺院の好意により撮影させていただいたものであり、宗教上の理由より正面からのものが多くなったことを御了承願いたい。本冊子の作成にあたっては次の方々の御協力をいただいた。心から御礼申し上げる次第である。

阿弥陀寺・円徳寺・光明寺・正円寺・松音寺・成覚寺・昌伝庵・正楽寺・清浄光院・仙岳院・善応寺・大満寺・大林寺・報恩寺・保春院・陸奥国分寺・龍宝寺・東北大学文学部東洋日本美術史研究室・同附属日本文化研究施設。

例 言

1. この小冊子は仙台市教育委員会が一般市民の文化財保護思想の啓蒙普及を目的として編集発行している仙台市文化財パンフレット第7集である。
2. 執筆にあたっては仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係主事渡辺洋一が担当した。
3. 本冊子の構成は、まず種別にその概要を記し、その後その具体例として仙台市内にある仏像彫刻を紹介する形をとった。
4. 仏像彫刻の紹介にあたっては、主要なもの数例について所在地・法量・年代・材質を明記し、若干の解説を加えた。
5. 本冊子掲載の写真は、所有者の了承を得て渡辺が撮影し掲載したものであるもので、無断で転載することを禁じる。

I 概 説

菩薩とは梵語（古代インド語）でいう「菩提薩埵」の略で、如来（つまり仏）の境地に達するために修行している存在をいう。

その姿は如来仏と人間との中間にあるものとして、古代インドの貴人の優麗な服装を形とっている。これは、仏教の開祖である釈迦（ゴータマ・シッタラダ；B. C. 383～303）が出家する以前はインド北部の小国の王子であったことからその姿を表現したものであるという。一般には、髪を結いあげた頭に宝冠をいただき、上半身裸の体に腰裳というスカート風の布をまとい、多くの装身具を付けている。また如来とは異なり蓮華その他の持物を有するものが多い。

その種類としては弥勒菩薩・観世音菩薩・勢至菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩・虚空蔵菩薩・日光菩薩・月光菩薩・地藏菩薩等に分けることが出来る。これらの中には単独で信仰されているものと、如来の脇侍仏として如来の補佐的な立場を示すものがあり、脇侍仏となる場合はそのほとんどの場合組み合わせがきまっている。



聖観世音菩薩立像（阿弥陀寺蔵；鎌倉時代）

▶弥勒菩薩

弥勒は仏に先立って入滅し、釈迦に従って来世成仏の授託を蒙り、浄土界に住み、56億7千万年の後に再び下界に出現し、成道して如来となり、釈迦の化益に洩れた一切の衆生を救済するという。また、弥勒はもと釈迦の弟子で実在したともいわれる。

従って造像される場合、修行中の姿を表わしたものが弥勒菩薩であり、悟りを開いた後の姿を表わしたものが弥勒如来である。

なお、仙台では今のところ造像例は見つかっていない。

▶観世音菩薩

日本では通常「観音」の名称で仏の慈悲を象徴している。

元来、「観世音」とは世の人々の救済を求める音声を聞き観察して、それらの救済に当るところから来ている。その場合、人々を救済しやすい三十三の姿に変わって救済に当る。従ってこれを観音の三十三身又は三十三変化という。各地によく観音の三十三番札所が置かれるが、それはここから来ている。

なお、観音というと普通正観音（又は聖観音）を指すが、ほかに千手千眼観音（略して千手観音）・十一面観音・如意輪観音・馬頭観音等の変化した姿を表わしたものもある（変化観音）。



写真1. 聖観世音菩薩坐像
(保春院本尊; 江戸中期)



写真2. 馬頭観世音菩薩坐像
(仙岳院蔵; 江戸後期)



写真3. 十一面観世音菩薩立像
(善応寺本尊; 平安時代後期)



写真4. 千手観世音菩薩立像
(光明寺本尊; 江戸時代?)



写真5. 如意輪観世音菩薩坐像
(仙岳院蔵; 江戸時代後期)



写真6. 阿弥陀三尊像 (右に観音・左に勢至; 成覚寺本尊; 江戸時代前期)



写真7. 勢至菩薩立像
(成覚寺蔵)

▶勢至菩薩

正式には大勢至菩薩といい、観世音菩薩と共に阿弥陀如来の脇侍仏として造像されるのがほとんどで、単独での信仰はないといってもよい。脇侍仏として阿弥陀三尊を形成する場合、観

世音菩薩が阿弥陀如来の慈悲を象徴するのに対し、勢至菩薩は智慧を象徴している。同じく智慧を司る文殊菩薩が徳行に重点をおいているのに対し、勢至菩薩の場合は人々の迷いを解脱させるところに重点が置かれている。

像容はほとんどが観世音菩薩と同じであるものの、観世音菩薩が宝冠に化仏をいただくのに対し、勢至は宝瓶を表わすというぐらいである。

▶文殊菩薩

「三人よれば文殊の智慧」といわれるように、智力を司る仏として信仰があるほか、釈迦如来の脇侍仏としても造られる。

ここでいう智慧とは我々が普段使っている知識とか知恵というのとは異なり、世の根本を見る智慧、つまり仏のさとりを意味する。

像容は右手に智剣を、左手に蓮華上梵篋を持ち、獅子に騎乗しているのが一般的であるが、それが典形となるのは平安時代以降である。

なお、天台宗系の寺院では食堂の本尊として、僧形の文殊像も造像されるようになる。

▶普賢菩薩

単独像で理性を司るとの信仰のほか、文殊菩薩とともに釈迦如来の脇侍仏として造像されるものが大半で、文殊菩薩が釈迦如来の智を象徴するのに対し、普賢菩薩は理・行を象徴する。

像容は合掌手もしくは如意を持ち、六牙の白象に騎乗した姿で表現されるのが一般的である。



写真8. 釈迦三尊像 (右が文殊・左が普賢; 松音寺蔵; 江戸時代後期)



写真9. 文殊菩薩坐像
(昌伝庵脇侍; 江戸時代中期)



写真10. 文殊菩薩坐像
(松音寺蔵; 江戸時代後期)



写真11. 普賢菩薩坐像
(大林寺脇侍; 江戸時代中期)



写真12. 普賢菩薩坐像
(昌伝庵脇侍; 江戸時代中期)



写真13. 薬師三尊像

▶日光・月光菩薩

薬師如来の両脇侍仏としてのみ造像されるもので、単独仏での信仰はないといってよい。

像容は一定しておらず、それぞれ手や持物の蓮華に日輪・月輪を有するもののみ判別することが出来る。

▶虚空蔵菩薩

無限の福德と智慧とを有し、全てのものに限りなく無量の利樂を与える力があるという菩薩で、この菩薩を念ずることにより記憶力がよくなるとの信仰がある。

▶地蔵菩薩

大地のように忍耐強く安定し不動であること、静慮深さを秘蔵していることから地蔵と名付けられたといわれ、大地の慈悲を神格化したものである。

仏入滅から弥勒出現までの間、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）から衆生を救済してくれる菩薩として信仰がある。はじめ貴族の間で盛んに信仰されたが、平安時代後期の末法思想の流行とともに一般化し、江戸時代になると民間の道祖神信仰、賽の信仰とも結びついて深く庶民に浸透し、現在みられるような姿になった。

また六道の救済者というところから、六つの分身が作られ、六地蔵の信仰もはじまった。

▶龍樹菩薩

紀元前3～2世紀頃南天竺に生まれ真言密教の祖となった龍猛即龍樹が仏格化したものともいわれるがどこにもその根拠はなく、これが必ずしも関係あるとはいえない。

仙台においては今のところ正楽寺に一例のみ知られている。

▶二十五菩薩

阿弥陀来迎図によく見られるもので、阿弥陀浄土で阿弥陀如来に随従する二十五の菩薩、つまり観世音菩薩（以下菩薩略）・勢至・宝蔵・白象王・徳蔵・普賢・薬王・薬上・三昧・定自在王・大威徳・華嚴・獅子吼・金蔵・大自在王・光明・山海恵・月光王・無辺身・陀羅尼・日照王・虚空蔵・衆宝王・金剛蔵・法自在王を指す。鎌倉時代以降二十五菩薩和讃の成立とともに一般化していった。

図像ではよく見られるものの彫像では希で、仙台では報恩寺に一例あるだけである。(表紙)



写真14. 地蔵菩薩立像
(成覚寺蔵; 江戸時代)



写真15. 地蔵菩薩立像
(仙岳院蔵; 江戸時代後期)



写真16. 龍樹菩薩坐像
(正楽寺; 江戸時代)

II 主な作例

観音・勢至菩薩

所在地 仙台市東九番丁48

浄土宗 無量山円徳寺

像 高 観世音菩薩 33cm余

勢至菩薩 38cm余

製作年代 桃山時代

材質 檜

円徳寺本尊阿弥陀如来立像の脇侍仏として本堂須弥壇上に安置されている。

二軀とも玉眼入寄木造の坐像で、蹲居坐の姿勢をとっている。製作年代については、本尊の軀内に墨書銘で慶長2年（1597年）とあることからこれらの脇侍も同時期の作仏と思われる。



写真17. 阿弥陀三尊像 (右が観音、左が勢至)



写真18. 観世音菩薩坐像



写真19. 勢至菩薩坐像

観音・勢至菩薩



写真20. 阿弥陀三尊像 (右が観音、左が勢至)

所在地 仙台市新寺三丁目5-3

時宗 法王山阿弥陀寺

像高 観世音菩薩 38cm余

勢至菩薩 36cm余

製作年代 江戸時代

材質 檜

阿弥陀寺本尊阿弥陀如来立像の脇侍仏である観音・勢至両菩薩は、ともに玉眼入寄木造の蹲居坐像で、全身漆塗が施される。

銘文その他はないが、像容から見て江戸時代前期の作と思われる(光背・台座共)、本尊の光背・台座もその折の作と考えられる。

〔註〕宮城県指定有形文化財；昭和55年5月30

日指定、詳しくは仙台市文化財パンフレット第6集「仙台市の仏像彫刻Ⅰ(如来部)」参照。



写真21. 観世音菩薩



写真22. 勢至菩薩

普賢・文殊菩薩

所在地 仙台市八幡四丁目8-33

真言宗御室派 恵澤山龍宝寺

像高 普賢菩薩 82cm余

文殊菩薩 71cm余

製作年代 江戸時代(元禄9年；1696年)

材質 檜

龍宝寺本尊釈迦如来立像の脇侍仏として四代藩主伊達綱村が京仏師右京・香允の二名に命じて作らせた像。

二軀とも玉眼入寄木造の坐像で、全身に漆地金泥塗が施されている。持物に未開蓮華を持つ普賢菩薩は白象に、右手に剣・左手に経文を持つ文殊菩薩は獅子に騎乗している。

〔註〕国指定重要文化財；明治36年4月15日指定、詳しくは仙台市文化財パンフレット第6集「仙台市の仏像彫刻Ⅰ(如来部)」参照。



写真23. 普賢菩薩

写真24. 文殊菩薩



写真25. 普賢菩薩



写真26. 文殊菩薩

日光・月光菩薩



写真27. 日光菩薩

写真28. 月光菩薩

所在地 仙台市東照宮一丁目1-16

天台宗 眺海山仙岳院

像高 日光菩薩 45.9cm

月光菩薩 39.2cm

製作年代 江戸時代(承応2年; 1653年)

材質 檜

旧東照宮薬師堂持仏薬師如来坐像の脇侍仏として現在仙岳院に安置されている。^{〔註〕}

像容は共に玉眼入寄木造の立像で、全身に胡粉彩色が施されている。主尊薬師如来坐像に承応2年の墨書銘があるところから同時期の作と思われる。

〔註〕詳しくは仙台市文化財パンフレット第6集「仙台市の仏像彫刻Ⅰ(如来部)」参照。

日光・月光菩薩

所在地 仙台市木ノ下二丁目8-28

真言宗智山派 護国山陸奥国分寺

像高 日光菩薩 92cm余

月光菩薩 92cm余

製作年代 江戸時代(正保2年; 1645年)

材質 檜

陸奥国分寺薬師堂本尊薬師如来(秘仏)のとして、堂内内陣中央の家形厨子前に安置されている。

二軀とも彫眼一木造の立像で、全身に胡粉彩色が施されている。背面には陰刻銘で「正保2年5月奥州住寛慶円信作」とある。



写真29. 日光菩薩

写真30. 月光菩薩

虚空蔵菩薩

所在地 仙台市向山四丁目4-1

曹洞宗 虚空蔵山大満寺

像高 36.7cm

製造年代 中世

材質 不詳

この像は、大満寺が別当となっている虚空蔵堂の本尊で、堂内の柿葺切妻造屋根を有する黒漆塗妻入の家形厨子内に脇侍の日光・月光両菩薩立像と共に安置されている。

虚空蔵堂は以前青葉山の旧仙台城本丸(現天守台)の場所にあったといわれ、仙台藩祖伊達政宗の仙台城築城の際別当と共に経ヶ峯に移され、その後二代藩主伊達忠



写真31. 虚空蔵菩薩・日光・月光菩薩

宗霊廟感仙殿の造営にあたり、万治2年(1659年)に現在の愛宕山に移された。

像容は彫眼一木造の坐像で、右手に剣、左手に宝珠を持つ物とする。台座・光背・持物及び脇侍の日光・月光両菩薩は施してある金泥の状態等から見て同時期のもの(堂宇が愛宕山に移された万治2年頃か?)と思われるが、像本軀は堂が青葉山にあった慶長5年(1600年)以前に溯り得るものと思われる。

なお、この像は秘仏となっており、開帳は十二年に一度丑年のみである。



写真32. 虚空蔵菩薩

地藏菩薩

所在地 仙台市東照宮一丁目1-16
天台宗 眺海山仙岳院

像 高 22.5cm

製作年代 江戸時代

材 質 檀木?

黒漆塗の厨子入りの童子像2鷗を脇侍にした三尊形式の坐像。像容は彫眼一木造の檀木(?)の素木に截金文を施しただけの像で、胡粉彩色の脇侍とのコントラストはみごとである。厨子入りということもあって保存は良好で、仏像というより工芸品的な色彩すらある。

なお、地藏菩薩に二鷗の童子像が脇侍に付くことは希である。



写真33. 地藏三尊像

地藏菩薩

所在地 仙台市宮町五丁目1-11

天台宗 清浄光院
(万日堂)

像 高 地藏菩薩①62.8cm
②62.4cm③64.2cm
④63.0cm

製作年代 江戸時代

材 質 檜



写真34. ① 写真35. ② 写真36. ③ 写真37. ④
地 藏 菩 薩

清浄光院所蔵の地藏菩薩は元来六地藏として製作されたものと思われ、そのうち4軀が現存している。

像容は4軀とも玉眼入檜材寄木造の立像で、全身は胡粉彩色が施されている。製作年代は江戸時代後期と思われるが、保存状況は良好とはいいがたい。

六地藏菩薩

所在地 仙台市新坂町6-1

浄土宗 亀鏡山正円寺

像 高 地藏菩薩①79.5cm (向って左奥端) ②81.2cm (左前)
③80.0cm (左奥中) ④80.3cm (右奥中)
⑤80.7cm (右前) ⑥81.1cm (右奥端)

製作年代 江戸時代 (享保元年; 1716年)

材 質 檜

元来は正円寺寺内の地藏堂に安置されていたものであるが、現在は本堂わきに守尊愛宕尊騎馬像とともに安置されている。

六地藏とは六道のそれぞれにその担当の地藏菩薩をあてたもので、地獄道と大定智悲地藏、(錫杖を持つ)、餓鬼道に大徳清浄地藏 (与願印)、畜生道に大光明地藏 (如意)、修羅道に清浄無垢地藏 (梵篋)、人間道に大清浄地藏 (施無畏印)、天上道に大堅固地藏 (経文) があてられる。

これらは右手の持物により見わけることが出来るが、正円寺の六地藏については、手先が欠けたり持物がなくなったりしてどれがどの像にあたるかわかりかねるものが多い (但し、向って左はじが大定智悲地藏、右前列が清浄無垢地藏にあてられると思われる)。

なお、六地藏の名称についてはこの外に檀陀・宝珠・宝印・持地・除盖障・日光の六つが与えられるなど諸説がある。



写真38. 愛宕尊 (中央)・六地藏菩薩

掲載仏像所蔵寺院所在地一覧表

寺院名	宗派	所在地
阿弥陀寺	時宗	仙台市新寺三丁目5-3
円徳寺	浄土宗	〃 東九番丁43
光明寺	臨済宗東福寺派	〃 青葉町3-1
正円寺	浄土宗	〃 新坂町6-1
松音寺	曹洞宗	〃 新寺四丁目6-28
成覚寺	浄土宗	〃 新寺三丁目10-12
昌伝庵	曹洞宗	〃 荒町56
正楽寺	浄土真宗	〃 新寺二丁目6-35
清浄光院	天台宗	〃 宮町五丁目1-11
仙岳院	天台宗	〃 東照宮一丁目1-16
善応寺	臨済宗妙心寺派	〃 燕沢二丁目3-1
大満寺	曹洞宗	〃 向山二丁目20-25
大林寺	曹洞宗	〃 新寺四丁目7-6
報恩寺	浄土宗	〃 新寺二丁目4-10
保春院	臨済宗妙心寺派	〃 保春院前丁50
陸奥国分寺	真言宗智山派	〃 木ノ下二丁目8-28
龍宝寺	真言宗御室派	〃 八幡四丁目8-32

参考文献

- 仏像図典 佐和隆研編 吉川弘文館
 仏像圖彙 紀秀信著 国書刊行会
 仏像の再発見 西村公朝著 吉川弘文館
 図解・寺院めぐり必携 (大法輪選書 大法輪閣)
 仏さまの履歴書 市川智康著 水書房
 仏像緊急実態調査略報 (仙台市文化財調査報告書第28集 年報2収録)
 仏像緊急実態調査略報Ⅱ (仙台市文化財調査報告書第41集 年報3収録)
 仙岳院仏像調査概報 (仙台市文化財調査報告書第41集 年報3収録)
 密教辞典 佐和隆研編 法蔵館
 望月仏教大辞典 世界聖典刊行協会
 仏像の見方・彫り方 田村文彌 広済堂出版

仙台市文化財パンフレット刊行目録

- 第1集 仙台のあゆみと文化財
 第2集 埋もれた仙台の歴史
 第3集 仙台市の古建築Ⅰ (明治以前)
 第4集 仙台市の古建築Ⅱ (明治以後)
 第5集 仙台市の古建築Ⅲ (失なわれた古建築)
 第6集 仙台市の仏像彫刻Ⅰ (如来部)
 第7集 仙台市の仏像彫刻Ⅱ (菩薩部Ⅰ)

仙台市文化財パンフレット第7集

仙台市の仏像彫刻Ⅱ

(菩薩部Ⅰ)

昭和58年3月31日 (第一刷)

昭和63年2月29日 (第二刷)

編集・発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町三丁目7-1

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24
TEL (263) 1166(代)